
時と運命

塵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と運命

【Nコード】

N7601H

【作者名】

塵

【あらすじ】

気に入った町の時計台に毎日通う少年レンある日時計台で事件が起こるその瞬間レンの運命が動き出す運命は時時は運命

いつもの日常（前書き）

初投稿です。小説など書いたことがないので表現がぐちゃぐちゃです…。

いつもの日常

世界の名は

「クリスタ」

この世界は多くの人々が住み

全ての人々が平和に暮らしていた

ここは水の町アクエスタ、どちらかというと裕福な町である。

町には多くの人々が住んでおり、

所々に噴水があり、真ん中には大きな高い時計台がありそのてっぺんからみるととても爽やかできれいな町である、

3

「今日もキレイな朝だ！」

時計台の近くにある家から朝早く一人の少年がでてきた

黒いＴシャツに、ショートパンツに赤いベルトに短くトゲトゲしい髪型をしたこの少年の名はレン。

「スウー…はあ…空気もうまいし、今日もいくか」

レンは深呼吸をすると時計台のほうに歩いて行った

「時計台のじいちゃんも来てるかな？」

と言いながら時計台のドアを開けた！

ガチャ！キーー…

「あ！開いてる！ということは！」

レンは嬉しそうにグルグルとてっぺんの部屋に続く階段を駆け足でのぼって行った

「はぁ…はぁ…いつも思っけどちょっと高すぎなんだよね…この…はぁ…はぁ…建物おー」

息切れをしながら文句をてっぺんに向かっていいながらスピードをおとさずに階段をのぼりそして…

「はぁはぁ…着いたー！！！」

レンはてっぺんの部屋の前で倒れ込みながら大声叫んだ

「疲れたー…この時計台もつと低くすればいいのに！！！」

ガチャ！

レンがさっきと同じ文句を叫んでいると部屋の扉がいきなり開いた

「おお！来たのか！」

扉からは60歳くらいのお爺さんがニコニコしながらでてきた

「ああ！おはよう爺ちゃん」

レンは立ち上がり下を向き手で服を叩き誇りをはらいながら言った

「おっはよっー！！！！」

その後明らかにお爺さんがだす声とは掛け離れた元気な声が帰ってきた

「はは！今日はいつもより元気だなじいちゃ…え！！！！？」

驚いたのか勢いよく目の前を向くとお爺さんの肩からひょっこりと女の子がでてきた

「ベルー！！！！？？？お、お前なんでここに！！？」

驚きながら女の子の名前を叫びながら指をさした

いつもの日常（後書き）

感想できればしてくれると嬉しいです（^^）

ベルとレン

「やっぱりここに来てたんだっ」

ショートカットのキレイな茶髪のこの少女はベル、

レンの幼なじみである、レンにとってはトラブルの元であり嫌いではないのだがさけていた、

唯一落ち着ける場所がこの時計台であったためショックをうけたようだ

「俺の秘密の場所が…」

レンは驚きとショックでたったまま固まってしまった。

「やっと突き止めたんだからー、いつも朝からお昼過ぎの時間居なくてさー暇で暇でしょうがなかったんだからー」

ベルは腕を腰にあてながら自慢げにいった

「は！！もしかして爺ちゃん俺がここに来てる事喋ったの！？」

レンは我にかえりお爺さんに問い詰めた

お爺さんは首を左右ふり答えた

「いいやベルちゃんは自力で君を探し当てたらしい」

「だから言ってるじゃない私が突き止めたって」

「はあくトラブルはもうこりこりだったのに…」

レンはベルを見るとため息をつきつぶやいた

「む！なぐにー！それじゃ私がレンのトラブルの元凶みたいじゃない！ー！」

ベルは頬を膨らませた

「だからそういつてんだよ！お前といると何故か厄介事を起こるんだよ！ー！」

激しくレンはベルに怒鳴ちらす

「そんなことないよ！ー！！例えば何！？」

まけずと言いつ返すベル

「ああいいぜ！

この前俺がお前の買い物に付き合った時
がたいのでかい男が彼女にプロポーズにプレゼントの指輪をはめさ
てあげてたその

一部始終を見ただけで不良と勘違いして男を蹴り飛ばしムードぶち
壊し、必死に俺があやまったつけな」

レンはベルが起こしたのトラブルをぺらぺらと喋り始めた

「あれはだって…あんな人気のないところでプロポーズしてるなんて
…普通思わないでしょ？」

冷や汗を少しかきながら笑顔をレンにむけた

「んじゃお前は人がわんさかいるところでプロポーズすんのかよ？
？」

「っ…」

レンの的確な言葉に何も言い返せないベルだった

「他にも……………だの！それ……
とか……………あれも……………」

レンはとまることなくベルのトラブル喋り続けた
時計台の部屋に入らずに……

「ごめんなさい……！」

そして20分間言い続け遂にベルは観念し謝った。

「分かったかこれでもいいいたりねえーくらいなんだぞ！」

腕をくみながらレンは再びため息をする。

「これこれ……！言い過ぎだぞレン！」

いきなり物静かにゆっくりお爺さんがレンを叱る。

その言葉にレンはハツとなり気がつくどベルは半分泣きそうな雰囲気
気をかもしだしていた。

「あつ……わりい……」

「いいよ…きつとあの事もまだ怒ってるんだよね…」

「それは違っ…！」

ダッ！

ベルの口から出たあの事の意味を理解したレンは否定しようとしたがベルは時計台の階段を勢いよく下りていつてしまった

「悪い爺ちゃん俺今日はもう帰るよ…」

「そうか…ベルちゃんと仲良くな！」

「ああ！また明日来る」

レンは暗いままでお爺さんと今日別れるのはまずいと思い笑顔で答えるとレンも勢いよく階段を下りた。

…そしてレンが家に戻り玄関の扉横にあるポストの中から鍵をから取り出し扉を開けようとした。

ガチャガチャ！！

「あれ？開かねー…？鍵さしたのに…」

疑問を抱いてると一瞬家の中から物音がした、レンは驚き扉に自分の耳をあてた

ガチャン、トントントン…

明らかに家の中から音がしていた

「誰か先に鍵を開けて入ってたのか？

音は台所の方……まさか！？！？」

ガチャガチャ！！

レンは顔を真っ青にして鍵を再びさし焦りながら扉を開けた。

レンの家は一人暮らしの為狭いので扉を開ければすぐに台所が見える

そして台所に立っていたのはレンの勘通りベルであった

「あ、お帰りレン♪今日は早いね♪」

時計台で見た泣きそうな顔は微塵にも残っておらず、いつもの笑顔で振り返るベルだった。

「やっぱり…」

レンは頭を右手でおさえながら小声でつぶやく

「え？何？」

「い、いや、それよりお前何してんだよ」

レンにはいつもの事なので大体答えは分かっていたが一応聞いてみた

「何って…見てわからない？料理作ってるの！」

「どうして俺の家で…？」

自信まんまんの笑みで答えるベルにレンは再び問いかけた

「いや、ほらなんか私レンになんかいろいろ迷惑かけてるみたいだからさ」

今朝の喧嘩の仲直りも兼ねてお昼ご飯作ろうと思ってさ！！」

ベルはほんの少しだけ恥ずかしそうな顔をし答える

「あ、俺用事思い出した！」

それを聞いた瞬間レンは苦い顔をしながら大声で言つと家を出ようとするが…

「あ、もうできたから食べていつてよ！ゝほら！」

「あ、ああ…」

そういわれるとしぶしぶレンは家の真ん中にあるテーブルに座った

「はい」

レンの目の前のテーブルに出されたのは緑色の物体や黒いスープなど料理とはおせじでも言えないものが並べられた

「う…」

それを見たレンはおもわず顔をひきつつてしまった

「さあゝ！遠慮しないで！！」

笑顔を向けるベル。

レンにはわかっていた、

ベルが今朝の事を根に持ってこんな料理を作ったわけでないことを、いつもそう、自分と喧嘩などをした後は必ずこうして勝手にレンの家に入り込み料理を作る。

本気で今朝の事を反省し自分の為に料理を作ってくれてる事を、根はともいいやつ、だからこそマズイなんて言えないのだ。

「い、いただきます…」

レンは恐る恐る箸を料理のほうにもっていき緑色の物体を掴み、それを自分の口に運ぶ

パク……………

その瞬間レンは顔を歪め真っ青になった

「ま、前よりパワーアップしてるう…ダメだあ」

口を押さえ吐き出そうとしたその瞬間だった

「それ自信作なんだー」おいしいでしょ」？？」

ベルのその言葉を聞きレンは吐くのを自力で止め、目にも留まらぬスピードで箸を動かし料理一気に丸呑みにし平らげた。

「うわー早ー」そんなにおいしかったの!？」

「ああ…う、うまかった…」

真っ青な顔でベルにむかってレンはピースをした

「よかったー」んじゃ私町の図書館に用があるからまたね」

ベルは大きくレンに向かって手を左右に振り家をでて行った

それを確認したレンは自分のベットにヨロヨロと、歩いてそのまま倒れてしまった

薄れゆく意識の中でレンは思った、

「結婚するなら料理が上手い奴にしよう」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7601h/>

時と運命

2011年1月6日02時12分発行